

平成28年度病虫害発生予報第9号

平成28年10月5日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
果樹	ナシ	黒星病	—	やや多い
野菜	キャベツ、 ブロッコリー	軟腐病	—	やや多い
		黒腐病	—	やや多い
		べと病	やや遅い	平年並
		アブラムシ類	—	平年並
		コナガ	—	平年並
		ハスモンヨトウ	—	平年並
	ネギ	黒斑病	—	平年並
		さび病	平年並	平年並
		べと病	平年並	やや多い
		ネギアザミウマ	—	平年並
		ネギハモグリバエ	—	やや少ない
		シロイチモジヨトウ	—	平年並

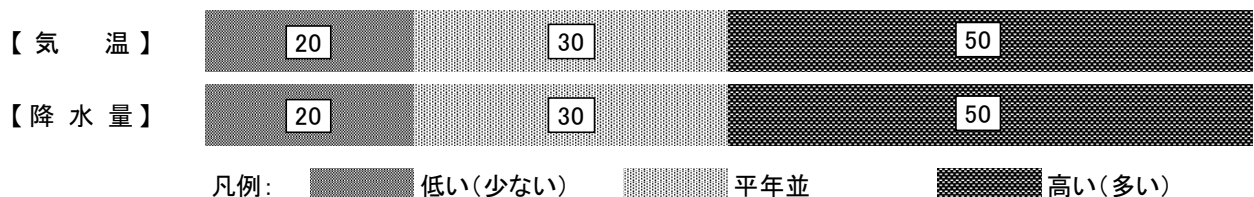
気象予報（抜粋）

1か月予報（10月1日～10月30日：9月29日、広島地方気象台発表）
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

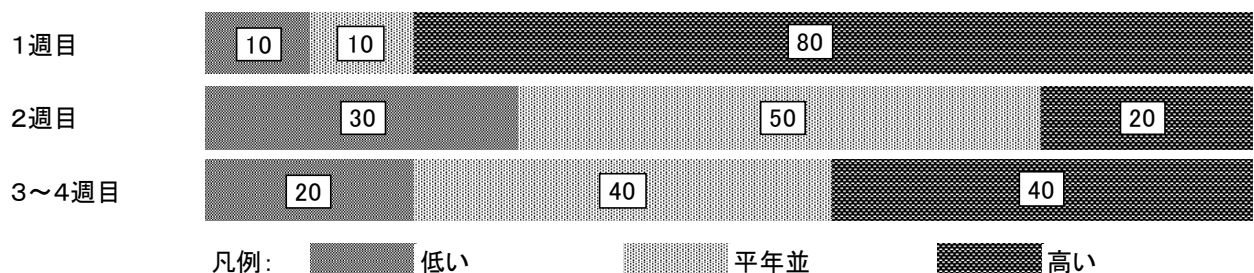
天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、多い確率50%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



果 樹

[ナ シ]

1 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生量はやや多い。

イ 現地ほ場における収穫果実の発病はやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本年発生が多かった園では、芽鱗片への感染を防ぐため10月上旬～11月上旬に2～3回の薬剤散布を行う。薬剤は、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液などを使用する。

イ 晩生品種との混植園などで薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数、散布回数など）に注意する。

ウ 病落葉も翌春の第一次伝染源になるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

野 菜

[キャベツ、ブロッコリー]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬までの台風等に伴った降雨によって根傷みが発生し、軟腐病等の各種細菌性病害が多発している。

イ 本病は、降雨が多く、滞水が多い場合特に発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の排水に努める。

イ 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。

ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風直後は、天候回復後できるだけ早く薬剤散布する。

エ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル800～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

オ ブロッコリーの防除薬剤は、ナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬までの台風等に伴った降雨によって根傷みが発生し、黒腐病等の各

種細菌性病害が多発している。

イ 本病は、降雨が多く、滞水が多い場合特に発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の排水に努める。

イ 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。

ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風直後は、天候回復後できるだけ早く薬剤散布する。

エ 肥料不足で発病が助長されるため、肥料切れしないよう注意する。

オ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1, 000倍液、ドキリンフロアブル500～1, 000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

カ ブロッコリーの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1, 000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められない。

イ 9月下旬までの台風等に伴った降雨によって根傷みが発生し、各種病害が発生しやすい状態になっている。

ウ 本病は10～15℃程度の気温で、降雨が多いと発生が多くなる。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、ダコニール1000の1, 000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）400～600倍液、フォリオゴールド800～1, 000倍液などを予防散布する。

イ ブロッコリーの晩生品種では、花蕾にべと病が発生しやすいので防除を徹底する。

ウ ブロッコリーの薬剤防除は、中～晩生品種ではフォリオゴールド1, 000倍液を10月中旬～11月上旬頃の発生初期に10日間隔で2回散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、リーフガード顆粒水和剤1, 500倍液、アクタラ顆粒水溶剤3, 000倍液、ランネート45DF1, 000～2, 000倍液、ウララDF2, 000～3, 000倍液などを散布する。

5 コナガ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 県予察ほ場（園芸試験場）および現地調査ほ場におけるフェロモントラップによる成虫の誘殺数は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア キャベツでは結球開始期に、ブロッコリーでは花蕾抽出期までに、トルネードエースDF2，000倍液、アニキ乳剤2，000倍液などを散布する。
- イ 上記生育期以降に発生がみられる場合は、キャベツ、ブロッコリー共に、ディアナSC2，500～5，000倍液、プレオフロアブル1，000倍液などを散布する。

6 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 県予察ほ場（園芸試験場）および現地調査ほ場におけるフェロモントラップによる成虫の誘殺数は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行うのが効果的である。ほ場内を観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。
- イ キャベツの薬剤は、トルネードエースDF2，000倍液、アニキ乳剤2，000倍液、マトリックフロアブル2，000倍液、ファルコンフロアブル2，000～4，000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーの薬剤は、アニキ乳剤2，000倍液、プレオフロアブル1，000倍液、ファルコンフロアブル4，000倍液などを散布する。

[ネギ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。
- イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足で発病が助長されるので、肥培管理に注意する。
- イ 防除薬剤は、ロブラール水和剤1，000～1，500倍液、ポリベリン水和剤1，500倍液などを散布する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。
- イ 本病は、夏期の気温が低いと秋期の発生が多くなる傾向がある。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発病前の10月中旬頃（平坦部）からマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）600倍液を10日間隔で2～3回散布する。その後の発生には、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。

3 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。
- イ 春期における発生が多く、発生期間も長かったことから、伝染源は多いと考えられる。
- ウ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加する。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病後は早期にまん延するため発病前からの防除に努める。
- イ 次年度に向けて越冬伝染源を減らすためにも、秋期防除を徹底する。
- ウ ランマンフロアブル2,000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）600倍液などを予防散布する。
- エ 発病確認後は直ちに、リドミルゴールドMZ1,000倍液、フォリオゴールド1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液、フェスティバルC水和剤1,000倍液などを散布する。
- オ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグリメック500～1,000倍液、ハチハチ乳剤1,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ウララDF1,000～2,000倍液などを、7～10日間隔で10月中旬頃までローテーション散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、アグリメック500～1,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 9月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）および現地調査ほ場のフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫による葉先の被害がみられる場合は、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液、トルネードエースDF1,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病虫害防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第10号の発表は、12月7日（水）の予定です。